

お試し版

幸福病

—私は、あなたの幸せを願う—

澤ナギ



Contents

P7. 幸願病 —私は、あなたの幸せを願う—

P101. 幸願病 SIDE：叶
—君の幸せを願う—

P167. 幸願病 after story
—あなたと共に、幸せな日々を歩もう—

キャラクター紹介

くうが かなた
空下 叶

ねがいの さち
願ノ 幸

幸の想い人で元経理課の同期。SIDE：叶編の主人公。幸を想っていて、何かと彼女を気にかけている。

本作の主人公。死願病の疾患者でずっと頭の中の「死」を願う声に悩まされている。

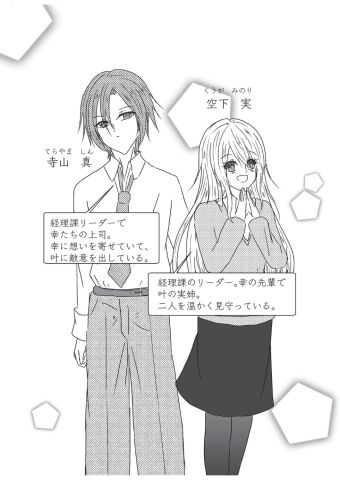


てらやま しん
寺山 真

くうが みのり
空下 実

経理課リーダーで
幸たちの上司。
幸に想いを寄せていて、
叶に敵意を出している。

経理課のリーダー。幸の先輩で
叶の実姉。
二人を温かく見守っている。



幸願病

—私は、あなたの幸せを願う—



イヤホンを付けて、音楽をかけて。

いろんな音を、シャットアウトしてみる。
世界の音、誰かの音。

——私の、頭の中の音を。

— プロローグ —

きっかけは、わからない。

時期だけはぼんやりと覚えていて、去年の秋ころ。気づいたら、私の頭の中には「それ」がいた。

思いたくない言葉。苦しむ私をあざ笑うかのように、「それ」はずっとずっと、付きまとう。

他人への、「し」の言葉。

とてもとても大好きで大切なものがあって、愛する人たちがいる、私の世界。

そんな、大切に愛する者たちに、私の頭の中は「し」を願う。

おかしいなんて誰よりもわかってる。大好きなものに、そんな言葉が浮かぶなんて。

人として当然の感情ではあるんでしょう。それもちやんとわかってる。小さい頃なんかは深く意味なんて考えず、「あいつなんて」って思ったりもしたし、なんならみんな当たり前のように

に口にしたと思う。

“しね”、なんて。

でもそれってやっぱり、ムカついてたり、その人が嫌だなんて思う瞬間だからこそ出てくる言葉なんじゃないかって思う。——きっと私たちとは。

“死願病”^{しがんびょう}と呼ばれる病を持つ私たちとは違って、その負の感情に伴って、合致した言葉が出るんだろう。

それを考えるたびに。

音楽の合間にも頭の中で「しね」という言葉が聞こえるたびに。

私——願ノ幸は、ねがいのきさちまたその言葉に後悔と罪を心に刻んで、ため息をついた。

死願病というのは、その名の通り感情なんて関係なくただ誰にでも「しね」と思ってしまう病らしい。大人になってからの方がなりやすく、環境とか人間関係とかで心が疲弊した人になりやすいと聞いた。その対処法は未だにわかっていないのか、いくら調べても出てくることはなかった。ただ、わかっているのは。

「死願病」になった人間は、今ではもう忌み嫌われるものだということ。

これが見つかった当初、二十年くらい前には未知の病としてニュースに取り上げられたそう
だ。頭の中でなんにでも「しね」と聞こえる恐怖感、おかしくなっていく大人たち。最初は誰
もが恐怖をしたり、大丈夫と声をかけるような風潮になっていたけれど。

一周回って冷静になったのか。人は、「死願病」そのものではなく、死願病で苦しむ人々に、恐怖や鮮度の目を当て始めたそうだ。

「病気とは言え、あなたは私の『死』を願っているんでしょ？」

「それが病気だとしても、思ったことは結局ひどい言葉じゃない。」

「君はおかしいよ。」

「大好きな者にまで、誰彼構わず『死』を願うなんて。」

「確かにそれは、病気だ。」

「でも治ったとしても。」

——病気だったとしても、願われたこっちはたまったもんじゃない。

だんだんと、だんだんと。冷静に考えれば当たり前だろうなっていう声がたくさん出てきて。騒がれたときから二十年。私が二十代の前半に入りかけた頃には、「死願病」という病

は、軽蔑の対象で。たとえその病になったとしても、誰にも相談なんてできず。よほどじゃない限り病院にも行かないという人が増えたらしい。それは、当然、私も。

大切な人がいる。大好きな人がいる。

でも私は、その人たちにも「し」を願う。

思いたくない。どうして思うんだろう。なんでこうなっちゃったんだろう。もしも仮にそれがその人たちに知られてしまったらきつと、許されることなんてないんだろう。それが、たまらなく怖い。許されないことも、「し」を思うこと自体も。

「……」

頭の中の声を聞かないようにしながら歩いている中ですりよって来た小さな命。にやあ、なんて鳴いて、私に「撫でて」と言ってるみたい。それがかわいくて、思わず顔がほころんだ。そうして自然と、手が伸びていく。

けれど。

「……」

その小さな命に触れようとした瞬間に、悪魔の声が聞こえて。思わず手をひっこめた。

——もしも。

もしも、私がこの手で触れてしまった。その瞬間にまた「しね」と思ってしまった。

この子が、本当に死んでしまったらどうしよう。

これは死願病の人が陥りやすい思考らしい。自分がそうなんじゃないかって思い始めた頃、図書館の隅に置かれていた、たった一つの死願病に関する文献を読んで知ったもの。

命あるものには必ず終わりが来る。

わかっているけれど。私は。

「……ごめんね」

ただただそれが怖くて、怖くて。ひっこめた手を伸ばすことはないまま、小さく呟いて。その場を足早に去って行った。

逃げるように猫から離れて、大通り沿いを走っていき、会社へとたどり着く。

「はっ、はあ……」

上がった息を整えて、少し汗ばんでしまった額を拭きながらエントランスに入った。すると。

「幸？」

名を呼ばれて、ぱっと顔を上げる。その人を見て、一瞬心臓がどきりとはねた。

入口から真正面に進んでいった、この建物の奥にあるエレベーターのところ。そこには、同期であり、

かなた
「叶」

私の、好きな人がいた。

前なら、口角が自然と緩んで足早に駆け寄っていたけれど、今、この死願病になってからは、罪悪感で素直に喜べなくて。少し足取り重く、近づいていく。

「……おはよ」

「はよ。なに、息切らして。走ってきたのか」

「……ちよつとね」

苦笑いで肩を煉めた私に、叶はふつと笑う。細くなるその蒼い瞳に、少しだけ心臓が早くなりながら、着いたエレベーターと一緒に乗る。思いのほか密集しているせいで、叶との距離は近くなった。これは、ちよつとまずい。なので申し訳ないけども。

「……願ノさーん？」

「……」

「なんで俺のこと押すかな？」

「走って、きたもので……」

汗も気になるし、この距離はどうしたって「あれ」が嫌で。叶をぐぐぐと押してみる。けれど。

「もうちょい詰めろって。周りに迷惑」

「うう……」

抵抗もなしく、さっきよりもぐつと寄られてしまう。

「……！」

そのときに、ふわっとした匂いが鼻をくすぐった。落ち着く匂い。これは、

「柔軟剤」

「お前が言ってたやつ」

「変えたの？」

「お前の匂い好きだから」

それは勘違いさせる発言ではないでしょうか。ぐつと照れを奥歯でかみしめてこらえて、少し守ってくれているような叶の腕の中でエレベーターが上に昇るのを待った。

彼——空下叶^{くろがかなた}とは、この会社の同期だ。

もともと同じ経理課に配属されていて、席も隣だった。叶が、私の作ったハンドメイドの作品をほめてくれたのがきっかけでよく話すようになって。

叶の優しさに、話の楽しさに。恋に落ちるのは時間の問題だった。

入社した年の秋ころには一緒によく出かけるようになって、正直、向こうも良く思ってくれているかなって思う瞬間がたくさんあって。いつ、言おうかな。でも勘違いだよな。その心の押し問答でもたもたしていたら。

春。

叶の異動が決まった。

一年で？　仕事がんばってたのに？　そう思うけれど、上の人からより力を発揮できる場所にといいことで、営業課に異動になって。階が違ってから、叶と逢うのはこの通勤・退勤時と、異動してから彼が行くようになった喫煙所くらいに激減してしまった。

「……」

そこから半年くらいしてからだろうか。死願病が発病したのは。入社当時、あんなに楽しかったのにな。仕事は忙しいけれど。叶と一緒にいれて、一緒にがんばって、とても楽しかった。

「……」

その春を思い返すと、悲しくて気持ちが落ちてしまう。そうしてそれに伴って、一瞬のときめきもすべてがさうらうように。

「し」の言葉が、私に押し寄せた。

上司はどうして叶を異動させたの。いつの日か、叶のおかげもあつて経理がよくなつたとも言つてたのに。今では通勤とかでしか逢えなくなつてしまつた。そんなことする上司なんて——。通勤と言へば、あの猫はどうなつたんだろう。生きてるかな。帰りに近く見てみる？でも、いなかつたらう？もし、死んでしまつていたら。——こわい。

「幸？」

恐怖に支配されそうになつた時、叶が私の名前を呼ぶ。今は、名前を呼んだらだめだよと思つても、口には出せない。ぱつと頭の中の標的は切り替わつて、目の前の叶に向けて、頭が言う。

しね、なんて。

聞こえた瞬間に一気に血の気が引いてしまう。好きなのに、頭の中では死を願う。どうし

で？

「幸、どうした」

「……なんも」

申し訳なくて、顔をそらした。笑えてたかな。でも、もし笑えてたら。

私、好きな人に笑ってそんなこと思ったの？

——ああだめだ。

「っ、行くね」

「あ、おい」

ようやくと着いた経理課の階。急いで人をかき分けて。

罪悪感から逃げるように、私はその場を後にした。

死願病は、仕事ややりたいことにも支障が出たりする。

「……」

パソコンとにらめっこをして、眉間にしわを寄せて、マウスに指を添えて、カーソルは「完了」という部分に乗せたまま。

私はかれこれ一時間ほど、動けていない。

理由は当然、「しね」という言葉が頭に流れてくるから。

ただただ「しね」だけだったならまあ、うん、まあなんとか乗り切れたんだろう。あとはその願う対象が自分だったなら全然よかった。でもこの病気の厄介なところは。

「……また、大切な人の大切なもの」

いつだって対象が「自分以外」だということ。

大好きな人ということもあれば、その人が大切にしているものだったりもする。対象はその時々で違うけれど、一貫して、自分以外であることは決して変わらない。

「……大丈夫、大丈夫」

そのたびに後悔して、頭の中を一回切り替えるの繰り返し。さあ切り替えよう、楽しいことを考えよう？ あれだ、今日のお昼は大好きなハンバーグだ。私はハンバーグが好きだ、楽しみだ。好きだ、楽しみだ。その気持ちのまま。

「……押せっ」

カチリ、完了ボタンを押す。そして一瞬安堵した隙に。

「っ、あーっ」

すぐさま聞こえた「しね」の言葉。

これはセーフか。いやでもわかんない。どうしよう。一気に押し寄せてくるのは不安。思ってしまったかもしれない。いや確実に思った。でもボタン押した直後だったから大丈

夫？　でも。

でも。

この作った資料を使い続けて、職場の人たちに負の念が行っちゃったらどうしよう。挙句の果てに、本当に死んじやったらどうしよう。そんな風に考えてしまう。

この死願病に慢されて、考えがほんとにおかしくなってるっていうのはよくわかった。けれどもどうしても考えてしまうそんな不安。そうして、どんどん。

「……もうやだ」

何もかも、楽しくなくなってくる。決定ボタンを押すことが怖い。新しく始めることが怖い。何かを作ることが怖い。

そのたびに、誰かへの「し」の言葉が聞こえてくるから。

その恐怖や不安は、また不安を呼んで。だんだんと自分が信じられなくて。何をしても、「ほんとに大丈夫？」なんて。あざ笑うかのような声も聞こえるようになった。

それになんとか「大丈夫」と呟いて、できあがった資料をプリントアウトするために席を立った。

日々が怖くても、前までは何かに没頭する時間が癒しだった。漫画を読んだり、夢中になれることをするのが、「し」から離れられてすごく心地よかった。

けれど。

「……」

今となつては、その癒しすらも、私を追い込んでくる。

「……はあ」

夜。昼はパソコンとにらめっこをしたけれど、今は毛糸の目とにらめっこしている。

「目編んでは頭に「し」が浮かんで、手を止めて、鳴りやんでからまた編んでみる。そうして、また。」

「うるさ……」

聞こえてくる、「し」の言葉。

死願病は日に日に進行しているのか、小さなころからやっていた編み物でも出るようになってしまった。入り込むことさえもできない、苦痛の時間。

「……うるさい……」

歩くときなら音楽を聞けば少し紛らわえられるからいいのだけど、何かをし始めるときはそれだと逆に不安になってしまう。正しいかがわからなくなってしまうから。けれど頭の声は日に日に大きくなる。その繰り返し。ぼんやりと編みかけのぬいぐるみに目を落とす。

小さなころから大々好きな編み物。

大学からはハンドメイド作家としても活動するようになって早数年。最初こそ当然のごとく無名だったけれど、好きなものということもあって反応にかまわず作品をどんどん作っていつ

た。そうしたら、作家として活動し始めてから一年後くらいには新作を出せば売れていくようになり。ファン、と言っているのかわからないけれど、いつも反応してくれる人が増えていつて、その嬉しさもあって、私はどんどん作品を作っていた。得意なのは手系で編むマスコットやぬいぐるみ。小さな子は特に喜んでくれて、それがうれしかった。

その喜びが罪悪感や恐怖に変わってしまったのは半年くらい前。

大好きな編み物でも「し」が聞こえるようになってしまったから。

一目編めば「し」の言葉が聞こえる。最初こそ、振り切って編み続けていたけれど、だんだんと。

この、「願い」が形となって。

手にしたこのぬいぐるみたちを持った子が死んでしまったら？

そう考えたら、恐ろしくなってしまうて。

編んでも発表や販売をしなくなったり、ついには新作の制作すらうまくできなくなってしまうた。

「……はあ」

そうして、編みかけては捨ててしまうことになる。作品になれなかった子たちを見て、思う。

私は何が楽しかったんだっけ、と。

みんなの反応？ 買ってくれること？ 作ること？ この病気がなくなれば、また楽しめるのかな。でも、本当にこの「し」から離れていいんだっけ。離れたいのに、何故か離れられない。それはこの病気に苦しんでるか弱いそんな自分が可愛いから？ それとも、「し」を願ったことを罪として、ずっと背負い続けなければと思っているから？

「どっちもなのかな」

忘れてはいけないと、思ってしまう。

だっていけないことを思っている。ましてや大好きなものたちに。たとえ病気だったとしても、きつと悪いことをしているんだということは、変わらない。

忘れてしまいたい、けれど、それは罪として一生背負っていかなければいけないと思う。

誰もある感情でも、きつといけないことをしているのは確かだ。

「……」

ぐるぐる考えていたら、ぼん、とスマホが鳴る。画面を見ると、SNSにメッセージが来ていた。

「最近、大丈夫ですか」

表示されたのは、そんな心配のメッセージ。

新作を上げていたところは、私のタイムラインやSNSのメッセージは喜びであふれていた。けれど今では、こうした心配の声が増えてきている。そんな資格ないのに。でも、新作ができなくてもこうして声をかけてくれるというのは、とてもありがたいことなのだ。だから、本当はもっと作品を作らないといけない。それなのに。

「……明日に、しょうかな」

今日は一段とうるさくて、この気持ちでは作っても後悔と罪悪感ばかりになってしまふ。作らなければいけない。わかっているけれど。

「……ごめんね」

どうしてもうるさくて、苦しくて。

また、「作品になれなかった子たち」を増やして。

一度針を置き、そのまま私は眠りについた。

死願病になってから、悪循環ばかりだ。

「……」

手は止まり、仕事は遅くなる。やりたいこともできない。でも、やらなきゃいけないこともたくさんある。

頭張らなきや。

死願病を抑え込んで、なんとか。

「願ノさん」

「！」

ぐっと、奥歯を噛みしめながらパソコンとにらめっこしていれば、隣から声がした。そちらを向けば、当時叶の席だったそこには、入社時から世話をしてくれている先輩の一人・寺山真さんがいる。その人はこちらに近づいてきて、顔を覗き込んだ。

「最近調子、より悪くなってる？ 平気？」

「……まあ」

「なんかあったら相談してほしいな」

「……ありがとうございます」

その人は今日も、距離が近い。

肩と肩が触れそうな近さ。きつとパーソナルスペースが狭い人なんだろうとずっと言い聞かせているけれど、それにしても、距離が近いのではないかなとも思ってしまう。

「ああ、そういえばこの前——」

「……」

そしてやたらと話しかけてくる。仕事中でも、休憩中でも。それに、頭の中でそつとため息をついて。ふと、よぎる。

しんじやえばいいのに。

「っ」

「？　どうかした？」

「い、いえ」

なんとか笑って、すぐさまパソコンに戻る。

——いけない。

幸願病 SIDE：叶
—君の幸せを願う—



—プロローグ—

姉に勧められて入った会社で出逢ったのは、明るくかわいい女の子だった。

「願ノ幸です」

祈りのすべてを名前に詰めたようなその女の子——願ノ幸は、同じ経理課に配属された同期で。

「よろしく」

「よろしくお願いします」

隣の席に配置されて、正直なところ、こんなかわいい子の隣なんてラッキーとすら思っていた。

映画の割引券が毎月もらえるという福利厚生が決定打になって入ったこの会社。姉には少し忙しいと聞いていたが、好きな映画が今よりも観れるようになるならと二つ返事で承諾したのが半年前。そこでこんなかわいい子にまで逢えるとは。これは毎日会社に来るのが楽しみになる。つくづく姉には感謝だと心の中で浮かれていれば、ふと目に留まるのはその子のバッグ。そこについている、これまたおしゃれなマスコット。さらに見てみると毛糸で編まれているものらしく、よくまあこんな細かく毛糸でできるものだとその職人のことは知らないが考えて見ていたら。

「？ あの」

視線がわかつたらしく、その子が不思議そうに首をかしげる。それに、素直に言った。

「おしゃれなマスコットだと思って」

そう、言えば。

「本当っ？」

ぱっと、嬉しそうに笑う。それに今度はこちらが不思議になった。そんな俺に、彼女が紡ぐ。

「これ、私が作ったの」

「へ」

「そう言ってもらえてうれしい」

ありがとう、と敬語も抜けて話す彼女の笑顔に。

ああこれは、とすぐにわかった。

これはもう、ひとめぼれだと。

そりゃあんなかわい子が嬉しそうに笑ったらときめくだろう。

けれど焦ってはいけない、と。その日の夜、映画を観つつぼんやりとあの子のことを考える。

まだどんな子かもわからない。それに気持ちだけでいつては失敗する。

子供のころから好きな子に無自覚で意地悪してしまうタイプだったらしく、よく好きな子を泣かせていたくらいだ。姉にこっぴどく叱られて治ったが。

だから気持ちだけではいけない。そして価値観というのも大事だからそこをきちんと自極めていく。

そうして相手を知る。

入社当日に決意したのは、役職でもなんでもなく、そんな恋愛事だった。

「他にもなんか作ってたりするんですか」

「あ、はい！　あ、あとで写真見せますね」

そこからというもの、まずは相手を知ろうといういろいろ聞いてみた。

趣味の話、普段の話。あまり最初からがつがつ行くのもあれだろうと思うから気持ち控えつつ。そうして入社して一か月ほど、いろいろ聞いていつて。

「めちゃくちゃ好きかもしれん」

「弟が楽しそうで何よりよ」

より相手を知ってわかったのは、結局それだった。

仕事終わり、姉と待ち合わせて過ぐす姉弟二人での食事の時間。手を顔の前で組んで言えば、姉の実はよそ行きの顔で祝福してくれる。それには慣れているので、あの子を想いながら

手はほどこいてイスにもたれた。

「でもいい子だしかわいいよねえ、願ノさん」

「話してもめちやくちやいい子」

「わかる」

よそ行きから戻った姉は肉をほおばりながら共感してくれた。それにこちらも嬉しくなつて。俺も目の前の食事に手を付ける。

この一か月で、いろいろ知れた。

ハンドメイドが趣味で、活動してて。新作は結構早く売れてしまうこと。作品を見たらどれもかわいらしくもありつつ、品があつて。男が持っていても違和感のないものだった。

家は一人暮らしで、一人っ子。姉の話をしたら驚いて、同時にうらやましそうだった。自分も姉が欲しかったと聞かされた時にはいつか、なんて先走った考えが浮かぶ。なんとか口からは違う言葉を出した自分をほめたい。

ほかに好きなもの、嫌いなもの。いろいろ知って、より好きだとわかつて。

出逢って数か月、秋に入る頃にはデートに誘った。

「映画？ うん、行きたい！」

そのころには互いに敬語も抜けて。

恐らく向こうは普通の出かけだと思っている初のデートでは、少しだけ踏み込んだ。

「……幸、つてさ」

「……え」

ぱつとこちらを向いた顔は驚いている。そりゃ今まで名字で呼んでいたのだから当然か。けれど引きたくなくて。

「……幸、つて呼んでると、すげえ幸せになりそうだから、呼んでいい？」

そう、なんとか目をそらさずに言えば。彼女は照れたように笑って、

「じゃあ、叶って呼んだらたくさんさんの夢叶えられるね」

なんて言うから抱きしめるところだった。

そうしてその後も何度かデートに誘って、会社とプライベートでずっと逢っているような日々を過ごしていたある日。

「いい店があるんだ、行かないか？」

なんて、一人で廊下を歩いていたら聞こえた声。なんつーありきたりな場面、とため息をつきそうになった時。

「困ります」

その声に頭を抱えた。

お前か、それ受けてんの。

かわいいから口説きたくなるのわかるけど。彼女だとわかった瞬間に足は速くなり、廊下の曲がり角を曲がれば。

やっぱり幸。そして彼女の前には、うちの上司の寺山さんがいた。

あれそんな気あったつけあの人というのは後にする。それより問題なのは幸に伸びている手だ。

それはだめだろ。

「幸」

思わず、プライベートだと約束していた名前を呼んでしまう。

それに二人ともこつちを向いて。

「叶」

ほっとしたような幸に、少し嫌そうな寺山さん。ここまで露骨に感情を向けられると逆に笑いそうになってしまう。それはなんとか隠して。

「なにしてんの」

「えっと」

「今日の夜映画行くんだろ」

ありもしない予定を言えば、幸は一瞬驚く。けれどすぐにわかった彼女は頷いた。そうして寺山さんに向いて。

「なので、ごめんなさい」

「……」

幸が一礼したのを見て、彼女を促し二人で課に戻ろうとしたとき。

「付き合ってるのか？」

そう言われ、頷いてやろうかと思つた。けれどさすがにこれではずるいなと理性が働いたので、寺山さんの方に一度振り返つてよそ行きの笑みを浮かべた。

「付き合つてませんが」

正直にそう言えば、次の問いが来た。

「それなのに名前前で呼ぶのか」

これは相当「執心か？ 思わず目つきが悪くなり、無意識に幸を引き寄せる。

「同期なもので。仲良くなれば名前くらい呼びます」

なんとか笑んでそう伝え、何か言いたげな上司を背にその場を去った。

「ごめんね叶。名前も」

「いや、俺も悪い」

歩きながら謝りつつ。できれば、と思うのは欲深いからか。

「幸」

「ん？」

こちらを見上げた幸はどこか安心した顔。それに嬉しさと、もどかしいような思いが湧き上がる。

どこかで、取られたくない、とも。

だから。

「会社でも幸って呼んでいい？」

そんな願いを口にした。そうしたら、彼女はばちばち目を瞬かせてから笑う。

「きちんとした場以外ならもちろん」

すべての願いを叶えてくれるようなそんな笑みで。

それにどんどんのめりこんでしまうのは、俺だけなんだろうか。

もどかしい、けれど居心地のいいこの関係。進んでしまいたい。そう思うのに進めない、そんな距離。

その日々を楽しみながらたびたびデートに誘っていけば、冬になる頃には、どことなく幸々からも良い雰囲気ではないかと思えることが増えて。勘違いでないことを願いながらタイミングを見計らっていれば、季節も過ぎていく。

あの日から好意を過剰に出してくる寺山先輩にけん制するように幸と距離を詰めながら。

春には、と決めて。前よりも近くなった幸とのこぶし一つ分の距離を、少しだけ狭くした。

春には、そう決めて。

年度末で忙しい日々を乗り越えて、迎えた春。

「……は」

何故か異動が決まった。

呼び出されて告げられたのは、上層部からの異動。しかも、営業課。ここは、今の部署とは階も違ふところ。飲み込み切れないままいれば上層部の人からの言葉が落ちて来る。

「決して君の能力が、とかそういう話じゃない。実際、君がいてこそ経理課はよりよくなつた」

なんとか聞き逃さないようにしていたら。

「ただ、とある人物から。君ならこっちの方がより力を發揮できるのではと打診があつてね」

思わぬ言葉に、止まった。

「人当たりもいいし、こちらとしてもそう思える点があつてこの判断になった。一年目で慣れてきた今の異動は、驚くだろうが」

「……いえ」

「期待しているよ」

ぼん、と肩に手を置いて、その人は去っていく。俺はその部屋に残ったまま。

「……はっ」

うつむいて出たのは、笑いだった。

「あの上司か……」

口は笑んでいるのに、出るのは怒り。

”とある人物”なんて思い至るのは一人だ。

上司で、なおかつ上にかけあえる人物は、うちの部署では数人しかいない。あらぬところからというのものもあるかもしれないけれど、あの日からその”とある人物”に敵意を向けられているのはわかっている。そしてこのタイミングでの打診。これはもう確定だろう。

「まさかこんな風にされるとは」

これ俺いなくなつて幸にすげえアタックするとかそんな感じだよな。うわ許せねえ。けれど今の自分にはどうしようもなくて。

入社して一年。次に決めたのは、”上に行こう”だった。

幸にはうまく濁して伝えて、それからはより必死に仕事に打ち込んだ。上に行つて、幸の隣

を取り戻したくて、必死に仕事をして。

逢う機会は減ってしまったけれど、その分逢えた時はより頑張れる。

休みの日も、前よりかは少ないけれど出かけることは変わらず。忙しくも充実した日々にはなっていた。

たまに幸に会えない日々が続くこともあった。仕事も忙しく、経理のときよりいろんなタイプの人に逢うことも多くなり、そのタイプによってはストレスも溜まる。幸に逢えればいいけれど、そう都合よく逢えることはなく。こちらから逢いに行こうにもタイミングが合わず行けない、休みの日も逢えない日々が増えて、ストレスは溜まる一方だった。

そんなとき、異動してすぐ上についてくれた先輩が「息抜きに」とタバコを吸っていたのを思い出し、タバコを吸ってみた。

「……舌」

大人はよくこんなものが吸えると、一回目はそう思ったけれど。慣れというものは恐ろしく、いつの日か、むしろそれがないと耐えられなくなっていた。

「は……」

「様になってきたな空下」

「そうでもないと思いますけど」

営業課に異動して四か月ほど経ったころ。すっかり行きつけになった、一階にある喫煙所で上司に笑う。タバコを吸って、ため息をつくように煙を吐いて。

先に出ると言った上司に頷いて、自分はもう少しだけ煙を楽しんだ。

また最近逢っていないかと、彼女のことを想いながら。

ぼんやりと、喫煙所の外の廊下を眺めていれば。

「！」

今ちょうど思いを馳せた幸が、目に入る。まっすぐに前を向いて歩いている幸は当然こちらを見ない。急いで火を消して、外に出た。

「幸」

「！ 叶？」

振り返った幸は、少しだけ疲れたような顔をしていたけれど、俺を見てぱっと嬉しそうな笑

みに変わる。その瞬間を見たことと、逢えたことの嬉しさで俺も顔がほころび、彼女に歩み寄る。

「なんか久しぶりだな」

「ね！ 同じ会社なのに」

くすくす笑う幸に心にあったかいものが広がった。ああ、癒される。何か月ぶりだろう。そう経ってもいないはずなのに、やけに長く感じた。

「叶はどうしてここに？」

どうやったらより逢えるかと考えていれば、幸に問われて我に返る。それに、「ああ」と困ったように笑って。

「タバコ」

「え、吸うつけ」

「部署変わってから吸うようになった」

「えー、そうなんだ」

自然と二人で歩き出しながら、幸を横目で見る。……タバコを吸う男は嫌だろうか。



幸福病 after story

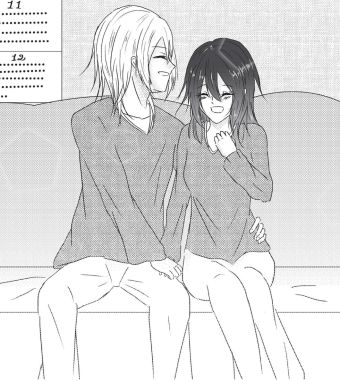
—あなたと共に、幸せな日々を歩もう—

11

.....
.....
.....
.....

12

.....
.....
.....
.....
..



死願病を叶に伝えてからしばらく。春になって、会社に入ってから三年目になり。

「ええ……う」

毎年見る異動の紙に今年も驚かされている。

退職には、寺山さんの名前。

そして経理課にやってくることを示す場所には、

空下叶の名前。

え、戻ってくるの?? 嬉しいけども。

「どういう話なのこれ……」

「いろいろあつたんだよ……」

「実先輩」

後ろからやってきた先輩に促され、ひとまず廊下を歩き始める。エレベーターへと向かう途中でさっきのことを聞いてみた。

「あの、いろいろって？」

「ふふ、聞きたい？」

「うーん、聞きたいような聞きたくないような……。泥沼ですか？」

「……いろんな意味で？」

なんでそこで遠い目になるの。こわいなこれ。

「ちょ、ちよつと怖いです」

「とりあえず、願ノさんはしつかり巻き込まれたとだけ」

「ますますこわい……」

「まあ本人から聞いてみるのもいいんじゃない。言うかわかんないけど」

にこつと笑って、エレベーターへと一緒に乗って。私たちが所属する経理課へと向かった。

叶に死願病を告げてから、日々が急に変わった。

まず初めに、隣に座ってた寺山さんが数日後から来なくなった。体調不良と聞かされていた

けど、実先輩や叶の様子を見るに違うらしい。

そして私の隣には実先輩がやってきた。彼女の「一時的」という言葉には首を傾げつつ、死願病で遅くなる仕事を彼女は何も聞かずにたくさんフォローしてくれた。

叶とは、また前のように出かけたなり、会社で逢うことも多くなった。

会社ではなぜか経理課に様子を見に来るようになり、私を見ては仕事に戻る。出社の時は駅で待ち合わせしようと誘われ、帰りは駅まで送ってくれる。そして休みの日に映画やカフェに行く。そんな気を使わなくてもいいと言ったのだけど、本人は「今までできなくて幸不足だから」となんとも勘違いしてしまいそんな言葉を言ってきた。

そうしてまた、前のように叶との時間が増えて。

それに伴って、半年経った今では死願病の症状は激減していた。

たまによぎることはある。でも、当時に比べたらこんな世界は生きやすいのかと思うくらい楽になって。前よりもまたハンドメイドをできる時間も増えて、心穏やかな日々を過ごしていた。

きっと私の、死を願った罪は消えないけれど、病を治して、そうしてから死を願った分、備

いをしていこう。

そう、思えるようになった。

「幸」

「叶」

経理課につけば、先に來ていたらしい叶がいた。

自然と顔がほころんで、足取りも軽くなる。そんな幸福を受ける資格はないと知っていつ、一瞬だけは、と自分に甘くして。隠った心を見透かされないように叶に笑った。

「えーと、おかえり々」

「ただいま」

うれしそうに笑って、私の頭を撫でる。けれど、「あの人」のように嫌悪感はない。ほんと心に広がる安堵感に、口角は緩んで。

「びっくりしたよ」

「驚かせようと思って。知ってるのは姉ちゃんくらい」

「言ってくださいよ先輩」

「正直悩んだよ。弟の驚きか後輩の驚きか」

今回は私の驚きかとくすくす笑って、三人で経理課へと入っていく。そうして、私の机までやってきてから。

「じゃあ私は今日から向かい側に移動するから」

段ボールにいれられていた荷物を持って、彼女は私の斜め前——元の彼女の席へ。そして隣には。

「え」

「またよろしく？」

昔のように、叶。

待って頭が追いつかない。

「ほんとどういうこと……」

「話してあげなよ叶」

「気は引けるけど」

そつと、いつかの日に私があげたマスコットを撫でて。

「落ち着いたら、な」

笑う叶に、自然と頷いていた。

そうして叶の異動もあってバタついた経理課が落ち着いたのは、数週間後。ようやく一息つけると思いきや。

「で、嫉妬で俺は飛ばされたわけ」

「なんてこと……」

幸福病 ー私は、あなたの幸せを願うー

お試し版

この作品はフィクションです。
実際の人物や事とは関係ありません。

運オチ(Fortuna X Eterni)

Pixel ID:6098231

Twitter: rei_fortuna

連絡先: <https://fortuna-cross-eterni.com/>

(お問い合わせフォームよりご連絡ください)

印刷: ちゃちゃ製本工房様

発行日: 2025/09/14

無断転載・複製・改写・オードション出品等はご遠慮ください。

帝國興

一戰、以、英、米、土、の、事、を、圖、る、一

陸、海、軍